

仮定法 指導案

入試へ挑むクラス

偏差値のめやす 60以上

Iコマ+課題 (反転) / 論理・表現Ⅱ・Ⅲ (高2・2学期～高3) / 二次試験の和文英訳・自由英作へ接続

単元の目標

混合仮定法・if 省略の倒置・without (but for) まで運用し、論題について仮定法で立論・反駁ができる。反論を想定した100語のエッセイが書ける。

評価規準 この帯で、この単元をどう見取るか

知識・技能	仮定法の各型に加え、混合仮定法・if 省略の倒置・without (but for) の形と含意を理解し、混合仮定法を用いて書く技能を身に付けている。
思考・判断・表現	〔話すこと (やり取り)〕「歴史のもしも」の論題について、混合仮定法を用いて自分の立場を述べ、相手の主張の中身に触れて反駁している。〔書くこと〕反論を想定しながら、自分の考えを100語程度のまとまりのある文章に書いている。
主体的に学習に取り組む態度	相互添削で他者の英文に具体的な改善を提案し、自分の答案を書き直そうとしている。

減点式にしないことがこの帯でいちばん効きます。仮定法を使いこなし形を崩した答案は、安全な直説法で書いた答案より高く評価する一挑戦を加点で拾う運用にしないと、二次で戦える表現が育ちません。エッセイは加点式ルーブリック (形3・反論想定3・具体2・語数2) で見取ります。

単元計画 全Iコマ+課題 (反転)

時	ねらい	主な学習活動	使う教材
前日	反転一形は各自で入れてくる	見取り図 (入試) を配布し、確認問題まで解いてくる。倒置・without の行まで自分で読む。ミニディベートの論題も前日に示す	見取り図 (入試)
I	判断と議論 (本時)	ドリル発展の大問3「どちらも正解」の検討→大問4の混合仮定法→表現ワーク発展のミニディベート	定着ドリル (発展) / 表現ワーク (発展)
課題	書いて、直す	反論想定つき100語エッセイ→次時の冒頭で相互添削 (3手順) →書き直して提出	表現ワーク (発展)
帯	記述で測る	小テスト (発展)。口頭で if 省略の倒置 (Had I known, ...) を1問加える	10分小テスト (発展)

教材 この指導案で使う紙 (どの版を・どこで)

見取り図プリント (入試)	前日の課題。倒置・without の行まで載っている版
定着ドリル (発展)	本時。大問3の検討→大問4の混合仮定法
表現ワーク (発展)	本時のミニディベートと、課題の100語エッセイ・相互添削
10分小テスト (発展)	帯活動。記入式なので記述の練習になる
定着ドリル (標準)	形が怪しい生徒への個別配布。大問4だけ切り出して渡す

仮定法 指導案 | 本時の展開

本時 1時間目／全1時間＋課題 本時の目標：混合仮定法で立論し、相手の主張に触れて反駁する。

時間	学習活動（生徒）	指導上の留意点・評価
5分	前日課題（見取り図の確認問題）の答え合わせ。 倒置と without の2問だけ扱う	解説はしない。答えと根拠を生徒に言わせる。ここに時間を使わないのが反駁の意味
10分	ドリル（発展）大問3―「自分なら a・b どちらで書くか」をペアで決め、挙手して理由を述べる	正解を1つに寄せない。レジスターの違い（簡潔か明示か）に名前を付けて板書する【思考・判断・表現】
10分	大問4の和文英訳（混合仮定法・Not a day passes ...）を個人で書き、複数解を板書で比べる	「まず安全な形で確実に書けること」を先に確認してから、上位の形を見せる
20分	立場を決めて立論をメモ（4分）→ミニディベート（立論1分×2→反駁30秒×2→まとめ30秒）を賛否を入れ替えて2試合。判定は隣のペア	メモは箇条書きまで（原稿にさせない）。反駁が読み上げになっていないかだけを見て回る。判定基準は2点に絞る【思考・判断・表現】
5分	課題（100語エッセイ）の論題と構成、ルーブリックを確認する	Some may say ..., but ... を板書して残す。反論想定が入っているかを自己点検させる

板書計画 左から順に残す

1. （左）本時の3つの型：立論（混合仮定法）／反駁 That may be true, but ...／譲歩 Even if that were true, ...
2. （中）大問3の検討で出たレジスターの違い―「短く言うか／はっきり言うか」を生徒のことで残す
3. （右）課題の構成：主張→理由→具体→Some may say ..., but ...→結論（90～110語）

つまずき この帯で必ず出るものと、その場の手立て

見取り（こう出る）	手立て（こう返す）
混合仮定法で帰結側まで would have＋過去分詞にしてしまう	「条件はいつの話／結果はいつの話」を2色で板書。今の結果なら would＋原形と、時間軸で示す
反駁が、用意した原稿の読み上げになる	That may be true, but ... の直後に 相手が言った語 を1つ入れる、という制約を足す
凝った形を狙って文が壊れる	「まず安全な形で満点を取り、そのうえで1文だけ挑戦する」と配分を指示する。挑戦は加点で拾うと明言しておく
エッセイが主張と理由だけで、反論想定が入らない	相互添削の3手順目を必ず実施させる。無ければ Some may say ... の1文を相手が具体的に提案する

この帯の勘どころ 倒置・without / but for まで届かせると、国公立二次の和文英訳に直結します。仮定法は「書けると差がつく」定番。採点は減点式にせず、仮定法を使いに行った答案を加点で拾ってください。ディベートは勝敗を競わせず、「型が実戦で使えたか」を見るものだと最初に宣言しておく、上位層ほどよく動きます。

